

海外

論文 &

レポート

スウェーデンホッティング村 の高齢者住宅

- 介護、やすらぎ、環境に配慮して -

玄幡 まみ (日本労働者協同組合連合会)



はじめに

オスロで昨年9月開かれたCICOPA世界会議で、スウェーデンから協同組合開発局(CDA)で働くアンナ・ヒルデブラントさんが高齢者ホーム¹⁾、プリスマークスガーデンについて報告をした。スウェーデンの福祉政策は日本でも、つとに知られている。協同組合でもさまざまな高齢者ホームが模索されている折でもあり、ヒルデブラントさんにメールで詳しい内容をと問い合わせたところ、ホームのマネージャーであるウーブリット・スベンソンさんが記事を送ってしてくれた。

この養護ホームは協同組合のスタッフで運営され、15人の高齢者が入居している。ホーム建設と運営に関わる特徴として次の3点あげられるだろう。第1に、ホームづくりと地域の仕事おこしの結合。第2、当初、市や住民からの反対があったにもかかわらず、粘りづよい働きかけの結果、協同組合運営を認めさせたこと、第3に地域の生態や環境に高い関心が払われ、福祉施設に環境問題を取り入れるというユニークな試みである。

ホームづくりは、1993年秋、高齢者介護の経験がある3人の女性が地域づくりについて話し合ったのがきっかけだと言う。その計画、取り組み、完成にいたるまでの歴史、運営や地域に与えている効果などについて、スベンソンさんから送られた記事やCDAなどの資料を中心に紹介したい。

さて、CDAは8つの市と州議会(カウン



ティ・カウンシル)と新しい協同組合企業によって1987年設立され、組合員の会費とともに国やプロジェクトからの助成を得て運営されている。直接、間接的に150の協同組合企

CICOPA世界会議で発言した
アンナ・ヒルデブラントさん



ストレムスンド地域

業の立ち上げに関与し、子どもや高齢者ケア、まちづくりや村づくり、消費者や生産者生協などの運営に関わっている。ホットティング村プリスマークスガーデンもその1つである。

地域の状況

まず地域の概況を見てみよう。ホットティング村があるストレムスンドはスウェーデンで第6番目に大きな市である。ストレムスンドには7つの高齢者住宅があり、内2つが協同組合で運営されている。

ストレムスンドの人口は約13,400人（内ホットティング村人口870人）。その大部分が農村部で湖、川、山々など豊かな自然に恵まれている。北の山岳地域はノルウェーに接しており、住民はアウトドア・ライフ、狩猟、魚釣りを楽しんでいるという。

2001年の失業率は男性6.2%、女性2.9%。最も重要な産業は木材業、電気工業、観光や情報技術を含むサービス業などで、その多

くは、従業員が1人か2人の零細企業である。

高齢者住宅づくりになぜ取り組みようになったのか

この地区の開発に関する議論を始めたのは1993年8月。地域は困窮し、少子化で保育園や学校の経営が脅され、仕事が減り若者達の多くが地域外へ移っていった。2,500人の人口中、60歳以上の高齢者比率が30%。こうしたマイナスの傾向と高齢者の増加は、高齢者や障害者のための住宅がないので、この村で24時間サービスが可能な高齢者のホームづくりについて考えさせたということである。

協同組合との出会い

養護ホーム建設については過去20年間も論議されてきたが実現にはいたらなかった。しかし開発の可能性への希望は、地域の将来への暗い見通しを明るい方向へと向けた。それはヘルスケアに関わる5人の女性たちが、協同組合について詳細を学びたいと思

い、協同組合開発部門アドバイザーのローラント・マームさんに会ったことから始まる。「この最初の出会いにたいへん啓発され、それが非常に幸運な結果になりました」と彼女は言う。



マネージャーのウーブリット・スペンソンさん

彼女たちは協同組合経営の高齢者住宅を知るため、唯一の協同組合ナーシングホーム(養護ホーム)であるストックホルムのブルクスガーデンの調査を行った。この訪問はケアを提供するのに協同組合経営がふさわしく、同時に仕事を組織するよい方法であるという考えを確認させた。

93年11月市議会は8人のための養護ホームを造るように決めた。しかし、彼女たちはケアの必要性が増しており、高齢者や障害のある人々は、親類および友人の近くの地区で住むべきであると信じ、15人用のホームを要求した。

取り組み開始—地元住民からの抵抗

新しい取り組みが始まったものの、実現には多くの困難が待ち構えていた。「私達の目的を達成するために、3年もの間、奮闘が始まるとは考えていなかった。」抵抗はまったく予想に反して「民営化」を恐れていた地域の人々から起こり、また地域の政治家からも起こった。例えば、それは、ある期間人々が地元新聞に手紙を送り続けるというように。「協同組合は人々にとって未知で危

険だという認識でした」とウーブリットさんは言っている。

そこでローカル、地方及び国家レベルまでの様々な陳情運動のキャンペーンを開始。市執行部、社会福祉理事会などへの農山村地区全域の異なる政治組織へのメッセージ配布。州知事および州の行政執行部の役人訪問。情報を知らせるためいくつかの村の人々を招待する複数の機会づくり。また、厚生大臣(健康及び社会福祉)、環境大臣、公務大臣、国立環境保護援助、健康および福祉国立評議会、地方自治体連合、多くの他の関係省庁、組織および人などへの電話作戦など様々な取り組みが行われた。その中で財団や看護婦の労働組合からの財政援助があり、このプロジェクトを前進させる大きな助けとなった。

環境に配慮したホームを

「地方自治体からの保証があり、かつ自分たちで運営する環境保護を考えた15の部屋がある養護ホーム」というのが彼女たちの念願だった。プランを作り、環境問題に関心ある建築家から支援をえ、彼らと共にラフスケッチを創り、環境問題について多くのことを学んだのである。

95年6月、政治的妥協の結果、15の部屋があるホーム建設を市議会が決定。市が建物の費用を支払い、環境保護を考えた建物



ホームの全景

にすることになった。彼女たちは経済学者や協同組合開発局からの弁護士、EUにおける零細企業の生態学的な設計プロジェクトに関わった環境エンジニアからの助けを得た。しかし市と協同組合側との見積もりの差があり、建設の合意はなかなか得られなかった。

97年1月22日、ついに地方社会福祉理事会はホームの経営を協同組合運営で行うことを決めた。決定にあたり環境問題への関心に基づいた目的やプログラムは、大変重要性をもっていた。プリスマークスガーデンがオープンしたのは97年4月1日。この日ホッピングは大きな喜びに包まれた。オープンハウスは州知事により開催され、ホームの入居者を始め、彼らの親類、スタッフ、多くの特別招待客など300人以上が参加したと言う。



ホームでは度々音楽家が来て演奏会が開かれる

ホーム経営の特徴は次の通りである。

- * できるだけ自宅のような環境であること。居住者の条件に応じてケアが行われること。親類縁者もホームを価値ある資

源としてみるができる

- * 24時間リハビリテーションが可能である
- * 運営の基本概念は、音楽や楽しみに溢れ、暖かさがあり、安全であること
- * 台所(ダイニング)は建物の中心であり、居住者はそこでいろいろな活動に参加できる
- * 音楽によるセラピー、マッサージ、リラクゼーションなど多様な高齢者介護がオープンな形で発展されること
- * リサイクルの知識について学び、広め、他の人を啓発する

様々な環境への工夫—全員が環境の授業を受講

先に紹介したように、このホームの特徴は協同組合による経営が行われ、地域に根ざしエコロジー(生態学)や環境保護について様々な工夫がなされていることである²⁾。

例えば、ホームの立地は地区の中心にあり、訪問者や職員の移動時間を減らすとともに自宅に近いところで仕事場や集会所を作る目的で選ばれた。その建物は伝統的なデザインで計画され、アットホームのような雰囲気を感じられるよう木材を使用。

天然の素材の活用。リサイクル紙の繊維を使った断熱材。地熱を活用した暖房用ポンプ。二階は電気暖房を用いて、エネルギー消費量を低く抑えている。固形廃棄物の活用。堆肥利用システムをもち、ポテトや野菜はそれを使って栽培。ホームで使う物は地域で買い、送迎などの輸送についても地元の交通機関を利用。地下室は地域の産物・商品の貯蔵用倉庫として計画。野菜栽培の温室も計画されている。

中でも注目されるのはホームで働く全員



高齢者が子供たちと一緒にいるのは幸せに感じる時。ホームの子供コーナーでのスナップ。

が環境の授業を受講したという話である。ホームづくりには環境政策とその実現が重視され、大きな目標の1つは、ホームが環境についての知識を広げる地域のセンターとなることである。

こうしたホームの環境保全への取り組みは高く評価され、看護婦組合などから1997年と1999年2つの大きな環境賞が授与された。また、全国スウェーデン年金受給者協会からプリスマークスガーデンが「1999年における養護ホーム」に選ばれている。

プリスマークスガーデンの経営について

最近のスウェーデンの福祉サービス事業

は公設民営方式である。スタッフは18人。協同組合がストレムスンド地方自治体当局に代わり6年間ホームを経営している。契約は3年間。後

ホームの暮らしぶりを訪問者に会って語るのが好きな入居者の1人、ラールス・エリックさん。



2年間延長できるが、その後は、新しく契約をしなければならない。ホームは24時間介護者が配置され、スタッフは仕事に関わると同時に、理事会のメンバーになることができる。こうすることにより、仕事や実用的な側面、経済的・管理的側面で影響を及ぼすことができるからである。

だれがここに住むことができるかの決定は、地方自治体当局が行い、すべての料金(例えば食糧、賃貸料等)は、地方自治体に支払われる。地区の境界内であればどこでも同じ費用で、最期まで住めるような安全な場所を提供している。複数の新しい仕事がつくられ、多くの人々が補助員としてここで働いている。

養護ホームの建設の後

養護ホームづくりは地域に二次的効果を生みだしているという。それは次のような分野である。

- * 仕事おこし、特に女性に対して就業機会を提供している
- * 新住民、多くは家族にホッティング地域への移転を魅力づけたこと
- * 地域の経済活動への支援
- * 新しい環境づくり、特に地域文化への貢献

「ホームは6年間成功しているが、しかしまだ多くの課題がある。世界中からどのようにホームが経営されているかを見学するため3,500人がここを訪れた。その中には日本人も含まれている。ホームづくりは、地域経済のためによいことだと思う。草の根から生まれた考えとそれを遂行するための責任は、真剣に受け止められなければならない。それは地域の存続と発展のために重要

性をもつ」とスペンソンさんはホームの役割について語っている。

今後の課題として—スウェーデンの民営方式—質の高いサービスの持続性—

大峰順二は、スウェーデンの民営福祉サービス事業の実際を視察して、次のように書いている³。民間がこの種の事業をやる場合、入札という競争原理が働く。競争相手より高い質であること、さらに行政が求める水準を十分に満たしていること。この2つの条件がなければ落札できない。しかも、最長で5年という期限つきである⁴。その間に行政、利用者から十分な満足度を得られなければ次の落札を勝ち取ることができない。従ってどこの事業所でもサービスの質をいかに高めていくことに真剣にとりこんでいる。

環境に配慮したホームづくりを実現させた彼女たちの試みは、協同組合経営で民間と競合しながら、いかに質の高いサービスを持続させるかにかかっている。今後の動きを注目したい。

追記

最後にアンナさんから彼女の写真が送られ、協同組合運動について労協連と引き続いて知識や経験を交換したいというメールが送られてきていることも付け加えておく。

(注)

¹ 原文では高齢者ハウジング、高齢者ホーム、また養護ホームなどと書かれているため、本文でも統一せず、高齢者ホームやナーシングホームとしておいた。

² <http://www.z.1st.se/ekoark/english/english.pdf> “A brief guide to ECOLOGICAL ARCHITECTURE in central Sweden and Norway Examples of ecologically interesting architecture in the counties of Jämtland (Sweden) and Nord- og Sør-Trøndelag (Norway).” から Brismarksgården in Hoting の章を参照。

³ 大峰順二、「北欧黄金の秋」、日本生活協同組合連合会医療部会情報誌『COMCOM』1月号NO.437、p.60。

⁴ ホームは既に6年運営されているという話とこの5年という数字が異なっている。各自治体で契約期間に違いがあるのかもしれない。ただ、サービスの質が問われていることは確かだろうと思われる。